

ゆら早生みかんの産地

和歌山県由良町の丘の中腹一面、柑橘畑が広がっている。その多くは温州みかん（学名：*Citrus unshiu*）または「みかん」を地元で繁殖させた種である、ゆら早生を栽培している。ゆら早生（学名：*Citrus unshiu Yurawase*）は早熟で、皮の一部がまだ緑色をしている9月下旬から通常収穫される。これは他の代表的な「みかん」の品種より数週間から数か月早い。ゆら早生の皮は柔らかく、薄く、非常に薄い膜で分けられた果肉はみずみずしい。ゆら早生は、糖度が高く、同程度の酸味も備わって味のバランスが良い。

1985年に、地元の農家が自分のみかんの木のうちの1本の枝についた果実が他のものより早く色づいていることに気付いたことが、ゆら早生みかんのはじまりだった。それから10年にわたる分析・調査を経て、その異常が枝変わり（芽条突然変異）の結果出現した、みかんの新しい品種であると明らかになった。その親品種は、日本で最も一般的な早熟みかん品種の1つである、宮川早生（学名：*Citrus unshiu Miyagawawase*）であった。数十年も前の1960年に植えた270本の宮川早生の木のうちの1本だけに突然変異が出現したのである。

今では、ゆら早生は和歌山県内全域に限らず日本中で栽培されているが、その起源は由良町である。最初に突然変異が認められた由良町北部の三尾川地区にその発見が刻まれた記念碑がある。由良町の柑橘農家の多くはゆら早生だけでなく、黄色い「小夏」、グレープフルーツの大きさのある「八朔」など他のみかん品種も栽培している。収穫されたものはほとんど和歌山県外に販売されるが、一部は地元で販売されたり、ジュース、ジャム、ドレッシング、その他の地域商品に使用されたりしている。